

淨土



昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一冊一頁一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別後援第三五二號
昭和三十年十一月二十五日印刷
昭和三十年十二月一日發行

第二十五卷

第十二號

十二月

十二月號

言 頭 卷

どんな人にも思想はある。それをどおいいあらわすかの上手下手はあつても、とに角、何等かのものの見方考え方というものは必らず持つてゐるはずである。

巻頭言というのは、雑誌の持つ思想を要約したものである。従つて、どんな雑誌にも、少くとも何等かの思想を持つ限り、巻頭言は必要であると思う。そのような考えで、本誌の巻頭言を毎月書いて來た。そして本月、本年の最終號のために紙をのべて、改めてすぎて來た今年一年を見返えしてみた、果して、今年の本誌に思想があつたか。そしてそれうまく言いあらわすことが出來たか。甚だ慚愧に耐えぬ次第である。

本誌の思想はいうまでもなく、宗祖法然上人の念佛信仰を現代に生かすことに決つてゐる。その本筋に、今年はうまく乗つて來られたであらうか。七百五十年の御遠忌をひかえて、宗門は着々その準備に精進している。本誌もまた、此線に沿つて進むべきであらうがそれはたゞ、御遠忌という時期的ポイントを目ざす丈けではなく、これを通して、宗祖の抱かれた意識を再現することではなければならない。遠忌というメモリアルなものでなく、今日に生きる吾々の胸に惻々と響くものを伝えるためにこそ、本誌の使命があることを斯して新しい年を迎えたいと思う。(竹中)

目 次

師 走 空 ……………吉田絃二郎(1)	佛教入門(3)……………佐藤密雄(8)
さ と り ……………宮林昭彦(4)	ビルマ雜記 ……………(14)
昌光律寺を訪ねて ……大橋俊雄(18)	和田合戦(下) ……………鶴田湛泉(21)
今年の宗教界を顧みて 編輯部(16)	新興宗教讀本(4)……………竹中信常(28)



師走空

吉田 絃一郎

今年もまたあわただしい師走を迎えることになった。庭の鶯の笛鳴きまでが常とはかわつてあわただしく聞える。

しかしながら師走ほど静かな思惟に入ることのできる季節はない。師走ほどさまざまのことを思い出すにふさわしい月はない。師走ほど俗念を斷つて、ひたすらに生死について考えるにふさわしい月はない。

十月になれば日本橋のべつたら市いちが開かれる、べつたら市の噂を聞けばすでに師走の郷愁もほのかに感じられる。

十一月の酉の市が來て熊手をかついで行く人たちを見れば、師走空の哀愁はいよいよ身近く感じられる。

いよいよ師走にはいれば納の観音、納の天神、納の大師、納の水天宮などと聞くのも逝く年のあわれを感じさせる。

若い人々は、昔からの古い行事には何の興味も感じないであろうが、古い時代から庶民の魂のなかにはぐくまれ成長して來た行事を失つてゆくのはさびしいことである。

つい、先達てのことであつた。朝鮮の戦線からスコットランドの軍樂隊が日本にやつて来て、日比谷公園あたりを行進したことがあつた。見るとあの古風な黒い羽毛の高い帽子をいただき、格子縞のスカート見たいな腰衣を着けている。お伽の世界でもなければ見ることでできない服装である。恐らく數百年前かれらの勇敢な祖先が戦場に馳驅したまゝの姿であらう。そしてかれらの奏づる行進曲は哀韻嫋々たるものであつた。聞けば敗軍後退の時に奏せられるものであるという。

原子力戦争が云々されている現代の戦線にあの傳統の古雅な軍裝を守り、秋風の寒い異國の街頭に悠々として悲壯な退陣の曲を奏で行くスコットランド民族の精神は大いに學ぶべきである。

十二月になれば伊豆の修善寺に行つて、たまたま臘八の日に草山にたたずんで、狩野川をながめながら半日を過ごしたことを懷う。

小春日和のあたかな日であつた。

城山を後ろにし狩野川を前にして枯れ草のなかにたたずんでいる間に、わたくしの視線は狩野川の彼岸の木立にかこまれた妙國寺にそそがれていた。

妙國寺は近在では大きな伽藍であり、椿の花が咲くほとりに、お萬の方の化粧の井戸の跡があつた。お萬の方は徳川家康の寵妾で、しばらく妙國寺にこもつていたと傳えられている。

妙國寺には四五度も行つたが、最後にたづねて行つたのは終戦後の春で、化粧の井戸の跡は麥畑になつていて、跡方もなく、そのあたりには黙々として女がただ一人麥を踏んでいた。

わたくしの後ろにそびえている城山は畠山國清の居城で、今は頂上に苦むした古城の石がわづかに草の間にそれと察せられる。國清は足利義兼の子で、或る時は二十萬の關東勢を率いて堂々と京師に入つたこともあり、また足利尊氏とともに九州に落ち、西海の菊池氏を討つてふたたび京にかえつて來たこともあり、はなばなしい活躍をしたが、策略をもてあそぶ人柄であつて、徳

というものがなかつた。最後にはこの城山を據守したが、三萬の敵に攻め落され、藤澤の寺に落ちのびた。寺では二人の僧と二頭の馬を付けてくれたので、京まで逃げ、七條の寺に頼つて行つたが、寺ではことわられて、かつて敵であつた楠正儀に救いをもとめたりしている。天下に身を寄せるところもなく流浪の身の果ては大和山城の國境で餓死した。いかに節操のない、徳のない人間にしてもかつては二十萬の大軍をひきつれて、將軍とうたわれた身の報いのあまりに悲惨なだけに、一掬の涙を枯れ野の草にそそぎたくもなる。

狩野川の東岸に妙國寺があり、西岸に城山があるが、今はあでやかなお萬の方を偲ぶよすがもなく、うらぶれた畠山國清の姿を思いやる人とてもなく、恩怨二つながら四百年の昔、七百年の昔の夢となつてしまつた。榮枯盛衰昔を語るものもなく、狩野川のせせらぎの音のみが聞える。

どこかで鐘が鳴つていた。わたくしは「今日は釋尊の悟りを開かれた日である」と思いながらもう一度東岸の妙國寺を見、西岸の城山をながめた。

除夜の鐘を聴くごとに想い出されるのは鷹ヶ峰の光悦のことである。

或る年の除夜に光悦は京の町を歩いてゐた。たまたま或る友人の本店の前を通りがかると、寒夜にふるえながら、多勢の人が店の前にたたずんでいる。光悦はそこに立つてゐる一人を捕えてたづねた。

「あなた方はここに何をしていたさるのか？」

「夜の十二時前に支拂いなさるのと、十二時過ぎてから支拂いなさるのでは金利がちがいますから、この店ではいつの晦日も、かようでございます。」という答えであつた。

光悦は「誰れも今夜こそ一刻でも早く歸つて妻子をよろこばそうと思ふのが人情であるを、わづかの利欲のために、こんな無慈悲なことをするとは何というあさましい心であらう。」といつて四十年の友情を打ち捨ててしまつた。

とり



宮 林 昭 彦

いつの時代、いづれの世界に於ても苦惱の絶えないのが人生の實なる相であらう。わけても現代の世相は、その移り變りの余りにも激しいために、わたくしたちは人生の歸趣を見失い、不安と動搖におのゝいて一日とても心安らかに過すことはなかくにできにくい。

しかし、わたくしたちは、この現代の苦難多い世相に遭遇して、たゞいたづらに悲しみ、失望してはならない。

先哲が「一心定まつて萬物服す」といつているが、一心定まらずして萬物はおろか、わが身一人の平安も幸福もえられないであらう。

わたくしたちは、今釋尊成道の日を迎えんとしている。十二月八日の黎明、曉の明星が東天にきらめく頃、釋尊は豁然と「さとり」を開かれたという。實なる人生にめざめられたのである。この日を

迎える毎にわたくしたちは、霜のようにきびしい反省を迫られ、今こそ心の覺醒をなすべき絶好の機縁を與えられつゝあることを感ずる。

釋尊とて人間であつた。たぐいなく秀でたひとであつたにせよ、やはり人間の欲望に苦しみ、人間の煩悩に涙されたことであらう。しかも、釋尊は生あるすべてのものの苦悶の聲を一身に聞かれたのである。そして二十九歳のとき、華やかな王宮をすて斷ちがたき恩愛のきずなを斷つて、悲壯な決意のもとに、心の苦悶を解消すべく家を出て一介のシャモンとしての求道生活に入つたのである。それから六年、ありとあらゆる苦行何人も行い得ないような烈しい苦行がすべて經驗されたのである。然しこの六年間の經驗によつて苦惱を絶滅することが出来なかつた。しかし、これによつて肉體をいかに

苦しめても心の平安は得られず、そのために却つて心の不安は増大するものであり、むしろ、心の健全な活動と平和な日常生活は、肉體の適度な榮養と健康とが必要であること、そして肉體と精神とは相關的のものであつて、健全な精神は健全な肉體にしか宿り得ないことを充分に知ることが出来たのである。そこで今まで六年間の苦行の無益をさと、苦行林の側を流れるネーランジャラ河（尼連禪河）の清き流れに汚された身を洗つたが、體力が弱つて岸に上ることが出来なかつた程であるという。その時に、樹神に祈願していた村の少女より乳粥の供養をうけられた。この乳粥によつて次第に元氣を恢復し、附近のブッダガヤに至つてビッバラ樹の下に端坐せられ、そして今までの精神遍歴を反省し、なお異常なる内心の葛藤を経験しつゝ、心的一大覺醒がなされて、遂に佛陀という完全な人格者となられたのである。これを成道という。時に釋尊三十五歳であつた。

ひとたび宇宙人生の眞理にめざめ絶對安穩の境地をえられた佛陀のころは、嘗つて経験したことのない歡喜に充ちていた。地上には何もものゝいとうべきものもない。人間には如何なるものゝのろくべきものもない。我身ひとたび無我平等の心に進めば、森羅萬象悉く生きゝとしてわが身に迫つてくることを感ずる。緣起無我無常の眞理の法を見たものには、すべては光かゞやかずにはいないのである。

きのうまでいたつらに心をいためた一切の現象が、いまや佛陀にとつてなつかしい意味と價值とを啓示したのである。生から老え、病から死へと輪廻しゆく惱ましい人間にいま一つの光明を見出した

のである。うたかたのような人生にいま一つのゆるぎなき不死の門をひらき、不死の一路を發見したのである。

「さとり」なる一つの精神的體驗によつて佛陀は、全く新しい心境に到達し新しい世界觀に立つたのであるが、然らば、いがにしてこのような鮮やかな轉換をなし得たであらうか。卒然としていまだ目にしなかつた心界に到達し得たであらうか。それは決して神の啓示によつたのではない。又一時的な胸醉や安價なセンチメンタリズムによつてこうした目ざましい心境を味つたものでもない。佛陀はあらゆる外的制約をはらいすてることにとめた。たゞひとり靜かに自己を掘り下げたのである。與えられたる人生そのものの實なる相を、あるがまゝに正しく究めつくしたのである。人間の寂しさ、地上の惱ましさの原因を自己以外に求めることなしについて自己の中につきとめたのである。自らの正しい認識と批判とをともしびにかゝけて、ついに大自覺の域につき進んだのである。そして一切勝者、一切知者になられたのである。

佛陀とは覺めたるものを意味する。何に覺め、さとられたのであらうか。それは常住にして變らざる「法」の體現であつた。法こそが佛陀を胎生した母である。それは宇宙人生の眞實なるすがたの味得であつた。あるがまゝの世界を、あがまゝに觀て、あるがまゝに生活をいただくということであつた。

わたくしは今、貧しい自分の心を通して、法から展開されるころを推し測つてみたいと思う。

わたくしたちは、よく未來に希望をかけたり、何らかの希望をよく要求したりする性質をもっている。釋尊の思想を味うとき、わが身の余りにその生活が打算計量に過ぎていることに深く恥じる

のである。縁の許されるまゝに立ち動いて行きたいと思う。生活と目的とが離れ離れにならずに、何の打算もない無量の生活に進みたいと思う。結果を忘れた生活こそ苦しみのない生活であらう。如何なる立派な結果が目前に迫つてきても與えられない時もあるものがある。むしろ、そうした仕事の成就に至るまでの歩みの中に尊さを見出して行きたいと思う。この大地をしつかりふみしめて、一步步の足どりの中に心悅を感じ全き満足を見出さねばならない。結果は一つの景物にすぎない。こうした心悅を釋尊が無願といわれた心持が深く味われる。勿論、わたくしは願わずにはいられない。求めることなしには一日も生きてゆかれないようにさえ思える。けれども、その願いに支配されないように、その求めることに悩まされないようにしたいと思う。たゞそうした結果に立ち進むまでのプロセスこそが、わたくしたちの唯一の人生でなくてはならない。仕事そのものに全力を打ち込まなくてはならないと思う。そこに三昧の知慧がにじみ出る。味い、趣きがある。人生の尊さと静けさとはこの心境であらう。

事の成否は、願いの有無強弱に關するものではない。いくら一つの結果を願い求めても、失敗するときはやはり失敗するものである。事のならぬとき、あわてればあわてる程、そこから遠ざかるものである。縁に任かせ、自然の動きに自分をゆだねられるものはしあわせである。そうして結果をうち忘れたところに、初めて清淨な生活が生れてくるのではなからうか。釋尊の説かれる如く、捨念清淨の豊かなる生活に於てのみ、眞實に尊い仕事がでてくるように思う。

結果を願わぬものは幸福である。何ものにも支配されず全く自由

な境地である。釋尊はこの境地を「さとり」だと言われている。少しでもこのところに近づきたいと念じている。

又、わたくしたちは、めざめの生活相の中に執着せぬ心を見出すことができる。執せざるところに一切は生きる。一つの美しい善意も、その行なつた善の形相を忘れきれないような執心があるならばそれは眞實の善ではない。たゞそれは欲である。何かに、そうした善をつかおうとする有所得の行爲である。執する善はそのまゝ時に惡となることさえある。すべての善は何ものかの結果も、善と惡との相をも忘れてしまつたところにその尊さがある。捨念清淨のこゝろこそいわゆる無漏善である。眞純なる善である。

執することは求め貪ることである。盲目の愛着である。釋尊によるならば愛とは何ものかを求めんとする本能的な欲望である。何ものかを奪わんとする盲目的な力である。さとりはこの渴愛の斷滅である。然らば眞實の愛とはいかなるものであらうか。それは何ものをも要求せぬ愛、相手の偉大さに合掌するこゝろ、相手の自分への尊い力を感じ感謝するこゝろである。そしてひたすらに對象の恭敬尊重とその正しき生長を念じ合掌するこゝろである。愛と感謝と合掌はこゝに一致する。釋尊は、すべての知る人知らざる人々の上に、すべての目に見る人見ざる人々の上に、すべての現在せる人現在せざる人々の上に、平等に感謝にみちた慈愛深き心からなる合掌をせられたのである。眞實の感謝と合掌と慈愛とは、必ずいたる所にきづかれずにはいないであらう。眞實は動く。法は動いて止まないものである。聞くものは是を信じ、見るものは是に動かざるはない。しかも聞くものと見るものとを超越せる眞實「自受用」のちからである。

眞實の愛は決して輕い、そして甘いものではない。それは淋しさ

と苦しさを耐え忍ばなくては到達することの出来ない心境であらう。あるときは、眞實に愛するために打ち罵ることさえあるだらう。しかし憎しみのむちではない。むちうつ者の目は涙に光つてゐる。罵るものの胸は愛にわなゝいてゐる。うたれるものはこれにぬかつき、罵らるゝものも涙せずにはいられない。眞實の愛はさゆるものなき一つの力である。慈愛は一切上に流交する。十方無碍である。無碍光である。眞實の愛は萬人に普遍せずには止まない。怨親平等の消息である。見ると見ざると、知ると知らざるとに論なくひたすらに一切人の上に善き縁のあらんことを慈念する「無縁の大悲」こそ人類生活の光明であると思う。しかし又、こうした無縁の人々にまでの尊い慈念は同時に見えざる力えの感謝と一致するものでなくてはならない。わが身は氣づかずにいるが、多くのかぞえがたき力を身と心に受けつゝある。氣づかずともそうした冥利は今もなお身と心とにせつせつと加わりつゝあるのである。過去せる幾多の人々、世を共にする限りなき多くの人々、そして宇宙自然の大生命力から思わざれども、冥加がはたらきつゝあるのである。この冥加に合掌感謝するものこそ、すべてのもののえの慈念をなしうる人々である。眞實に愛することは、むしろ愛をうけとることである。すべてのものの慈念に氣づくことである。愛を興えることは愛をうけることとなくてはならない。こゝに慈愛は自他平等にうくるのである。こゝにさとりさとりのこゝろがあるように思う。

菩提樹下に端坐せる釋尊は、澄みきつて曇りなき知慧と、限りなく深い慈愛とが感宇宙人生にあふれていることを體現されて、靜かにが謝合掌せられたことであらう。釋尊成道の日、深い反省のなかに心機一轉して、新しい出發の日としたいものである。

人生去來

理をひらく

澄みかえる水面を凝視めて糸をたれている人、その人は、魚のかゝるのを待つてゐるのでしようか。そうではない。「待つ」ことさえも忘れてゐるのです。こゝに釣道は、水と自分と一體になつてゐるのです。一體とは無心に楽しんでゐることです。無心に楽しんでゐるとは、待つことを忘れてゐることです。結果を忘れてゐるのです。

待つものは、急ぐものであります。焦るものです。焦るとき人は、外ならぬ自分の手で、自分の幸福を打ちこわしつゝあるのです。運命にまかせた者に、急ぐということはありません。焦せるものは運命にまかせて生きてゐるのではなく、逆に自分の手で運命を何とかしようとしてゐる人です。

魚のかゝる、かゝらぬは、運命についたことです。焦る人は自分の力で、魚をとろうとする者です。そして焦れば焦るほど魚はかゝりません。魚のとれないのは、その人の運にまかせて、糸をたれている。釣そのものを楽しんでゐる。そういう人に反つて魚はかゝつてゆく。運にまかせて、悠々無心。水と糸とに心を忘れ、時を忘れるのみであります。運命は、運命に身をまかせることによつて、人の自由になるものです。(S)

佛 教 入 門 (その三)



生 存 の 構 造 (一)

佐 藤 密 雄

一、佛教の物質觀

明治の中頃迄の佛教を研究する人は、先づ俱舍論と言ふ書物を勉強した。實は此書は、印度の世親菩薩と言はれる方が、當時の印度佛教の大論書を要約し批判せられたもので、古くから小乘佛教と言はれ近頃は上座佛教とも言はれる印度の古い佛教の思想を知るに最も便利な書である。然し、此を完全に學ぶのに昔の人は八年もかゝつたと言はれる程に難解な書である。其様な書であるが此書の中に五位七十五法と言ふものが説かれてあるので其部分又は其部分の解説が今日でもなほ勉強されるので

ある。

五位七十五法とは、佛教の見た生存の分析とも言ふべきもので、肉體や山河大地を構成する物質の見方や、此に對する人間心の構造を五種七十五に分けて解説するものである。五位とは色法と心法と心所法と不相應と無爲法との五種のこと、色法の内容に十一、心法の内容に二、心所法が四十二、不相應法が十四、無爲法が三と數へて此を合して七十五法と言ふのである。

其處で先づ第一位の色法十一種は佛教の物質觀である。色法の法は「もの」の意味であると考へてよく、色法とは「色なるもの」である。色とは色彩形狀あるもの

と言ふことで、肉體山河大地等の、今日物質とせらるゝもの一切に相當する。勿論、當時の印度の科學的常識に基づいて作られたものであろうが、佛教の物質に對する定義めいたものを列擧すると、(一)四塵合成、(二)四大種所造、(三)變碍、(四)極微所成である。

(一)の四塵合成と言ふのは、色即ち物質とは色と香と味と觸とのあるものゝ意味である。即ち必ず視覺と嗅覺と味覺とに依て知られるものと言ふことである。

(二)の四大種所造の四大とは地大・水大・火大・風大でギリシアでもインドでも、古代の人々は地球や物質的世界をば、地・水・火・風等の要素から出來て居ると考へたらしい。佛教も其れを受ついたのであるが、佛教では更に此を進めて、地大とは堅性で硬度のこと、水大とは濕性で濕度のこと、火大とは暖性で溫度のこと、風性とは動性で可動性のことゝ意味づけて、凡そ物質には、硬度と濕度と溫度と可動性とがあるとし、此の四性質のあるものが物質であると定義したのである。

(三)の變碍とは、變は破かい變化で、物質とは破かいするもの、形や色の變るものと言ふ意味である。碍とは觸つて手答へのあることで、此は物質たるものは一定の空間を占めて、二物同時に同處を占めることの出來ないもの、即ち排他不可入性のものであることを言ふのである。

(四)の極微所成と言ふのは、物質は原子の集合であると言ふのである。極微とは原子の意味であるが、此は勿論ギリシアのデモクリトスと同様に、存在の最微少のものを考へて居る原初的原子觀のアトムである。

以上の四種の定義は一時に出來たものでなく四つの場合の四つの定義が集まつて居ると考へられるが、此様に定義される物質即ち色法を現實の生存について具體的に數へる場合には、此を眼耳鼻舌身の五根と色聲香味觸の五境と、此に無表色と言ふ特殊なものを加へて十一法あるとする。五根は言ふ迄もなく、感覺器官に基づいて五と數へたもので人間の身體であるし、五境とは、此の身體に、視覺聽覺嗅覺觸覺(五根)を通じて感知されて、環境とし對象とせられる物質界である。

其處で注意すべきことは、物の世界を具體的に數へ上げるのに、眼等の五根の感覺器官とその對象としての色等の五境とで數へることである。此のことは、物質と言ふ意味の文字に色彩形狀を意味する色を用ひること、又四塵合成とか四大種所造とかと定義することゝも相まつて、物質をば感性的な存在と見て居ることになる。即ち生存を構成する中の物質即ち色とは、その人に感覺せられたものを言ふのである。即ち色とは感じられて存在となるもの、感覺的な存在を意味して居ることが佛教に於ける物質觀の特徴をなして居ることが知られるのである。

る。

最後に特種な物質としての無表色であるが、此は色法の中に配屬してあると言ふことで、完全な意味で物質ではない。先づものから言ふと、「誓ひの實體」とも言ふべきものである。例へば、佛教徒が佛前で授戒をする時に「一生涯盗みを致しません」と口に言ひ身體に誓を意味する行動をなした時に、身内に「一生盗まない」と言ふ「誓ひの實體」が成立する。そして此が生涯身體と（言ふよりは人格）の中にあつて、盗みをする機會が生じて「盗みません」効果を生ずると言ふのである。此場合の「誓ひの實體」が此處に言ふ無表色のことである。無表とは見えないこと、感覺的でないことを言ふので、此點からだけでも物質即ち色法としての狀件にかけて居るが、然し目に見える身口の行爲（表業）から發生したものであるから、發生せしめた原因に配屬して特殊物質としたのである。また、此無表色の意義は、例へば「盗みません」と誓ふ行爲の方に重點があり、且つ一度「盗みません」と誓つたことの成功の爲に自信を持たせる爲めに考へ出されたものであると見られる。だから佛教の中でも、此を無表色と言はずして、「不盜」の効果を生ずる功能ある精神的要素（種子）と見る派もある。然し、無表色を物質と見るか、精神と見るか、いづれにしても、此様なものを考へた佛教の實踐性甚だ含蓄のあ

るのであるとすべきである。

二、心の構造（一）

五位の第二の心法とは簡單に言つて心であるが、嚴密に言ふと純粹な意識する働きである。心は集起と解釋される文字で、識り考へる働きに種々や感情感覺が結びついて、具體的なねたむ心や愛する心となるのであるが、今此處では、その様な具體的な心でなく、種々な感情や感覺等の方は次に述べる心所法と言ものに分離して、たゞ識り考へる働きだけを取り上げて心法と言ふのである。

其處で心法とは純すいに識り考へる働きだけのことである。そして此は一法であるが、働き方としては眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識の大識であるとする。此の六識の中の初めの五つは、例へば眼識とは視覺のことで、色や形を見たまゝに、赤いものを赤いと傳へるだけであるし、又身識にしても感覺されたものを、熱いものを熱く感じたと識るのみで、此は感覺されたものをそのままに受取るだけである。即ち判斷意識の感性的資料を意識に提示するだけの働きである。第六の意識の方は、眼識や耳識乃至身識等で感じ識られた所を綜合判斷して例へば赤色圓形芳香等を綜合して「りんご」と識る如きである。又眼等の五感に關係のない思想觀念等は第六意

識が直接自身で捉へ自身で判断するのである。

其處で眼識乃至意識は、勿論其自身善でもなく、惡でもなく、鏡か白紙の如くありのまゝをありのまゝに識り考へる働き若しくは能力が、此に種々な屬性を付けて善惡其他の具體的な心に仕上げるのが次の心所法である。

五位の第三の心所法は、既に述べた様に、識り考へる働き、若しくは能力である心に結びついて、此をば具體的な、ねたむ心や愛する心とならしめるもので、心の種々な屬性となるもの、若しくは心を具體化する種々な心情感情等の條件であると見られる。此に五種四十六法ある。

心所法の第一種は大地法(十法)であるが、此は心の働きが心に具體化する時に、必ず必要な十一の條件とも言ふべきものである。受・想・思・觸・作意・欲・慧・念・勝・解・三摩地の十法を大地法と言ふのであるが、受は識り考へる対象を感受する働き、想と思は知覺と表象、觸は識る働きと知らるゝものとの焦點を結合さす働き、作意は意識判断を促す働き、欲は識らんとする意欲念は記憶、勝解は正確に識らしめる働き、三摩地は識る働きを識られる対象に定着させる作用である。識り考へる働きに此の大地法と呼ばれる十法が加はれば、具體的に心として働く最少限の(心一)、大地法(十)十一法)心が成立する。此の最少限の心は勿論未だ善惡等に色彩ら

れない以前の心である。たゞ識り考へる能力である心を實際上にあることを考へたり、眼前の事實をあるまゝに識別したりする心に具體化した状態である。そして此は其れだけでも獨立心として働くが、同時に一切の心の基本なる心であつて、此に善の心情が加はれば善心となり惡の心情が加はれば惡心となる如きである。此を善惡以前の心の意味で無記心と言ふのである。

此無記心に心所法の第二の大善地法(十法)と言はれるものが加はると善心になる。大善地法とは信・不放逸・輕安・捨・慚・愧・無貪・無瞋・不害・勤の十法で、此中で信とは心のけがれを清める働き、輕安とは身心を軽く快適にする作用、捨は心の働きを中庸ならしめるもの、勤は善につとめはげます心情である。如何なる善心でも、例へば人に物を喜捨する心にしても、人命を救ふ行を生ずる心にしてもすべて無記心十一法に此の十法が加つて成立した心(二十一法)である。従つて善心が具體的に如何なるものとして現れて居ても、善心を善心ならしめて居るものは此大善法の全部即ち十法である。故に亦、佛法の善心の善は此の十法の渾然一體となつた所に發するとも言へるのである。

又此の十一法から成る無記心に心所法の第三の大煩惱地法(六法)が結びつくと十七法から成る煩惱心が成立する。大煩惱地法とは痴・放逸・懈怠・不信・昏沈・掉

擧の六法で、此中痴は道理に無知なこと、昏沈とは心を暗く重く沈ませるもの、掉擧は心を悪くたかぶらせるものである。佛教では煩惱とは、人間の心を束縛して眞實に至らしめない意味で心をなやますものとするが、然し此は世俗的・道德的意味の惡に迄至るものではないとする。その意味で、煩惱ある心を惡と言はず眞理覆ふて居るものゝ、ある心、即ち有覆無記心と言ふのである。つまり世間的には惡ではないが、佛教的には聖道に依つて、眞理を覆ふものを取除かねばならぬ心である。

三、心の構造(一)

其處で、進んで、心を世間的惡心にさせる心的屬性は第四に大不善地法と呼ばれるものであるが、此は無慚と無愧との二法である。此の二法が無記心(心一)と大地法(十)の十一法心(心二)か又は上述の煩惱心(心一)と大地法(十)と大煩惱地法(六)の十七法心(心二)かに加はると十三法の惡心か十九法の惡心かが生ずるのである。無慚は惡をなして内心にはづるなき心の働きであり、無愧は外に向つてはじない働きの言ふのであるが、佛教が惡心と言ふもの、根元を此の二つの合一した働きに見て居るのは佛教を學ぶものに注意し含味すべきことの様である。

以上に依て、先づ考へ識る心の働きの、實際に考へ識る心とするには大地法の十法が加はらねばならぬとし、

此を無記心としたが、すべての善心は此の無記心に信等の十の大善地法の結びついたもの、同じく凡そ煩惱心となすものは無記心に痴等の大煩惱地法の結びついたもの更に惡心となるものはすべて、無記心又は煩惱心に大不善地法の無慚無愧の二法の加はつたものとするのである。即ち佛教では人間心は無記心と善心と煩惱心と惡心の四種に分けて居るが、今はその四種の心の原則的な構造内容を言つたのである。

以上の外に心所法がまだ二種あつて、その一種に小煩惱地法として、忿・覆・嫉・慳・惱・害・恨・詔・誑・憍の十法を數へる。此等は人間の心を怒りや、ねたみや、どん欲や、さぎや、たぶらかし等に働く心とならしめるものである。此十法は、先きの大地法等とは異つて、一々獨立して、單獨に煩惱心又は惡心に結びついて、例へば誑の心所が惡心に結びついて、人をたぶらかす惡心を成立せしめることになるのである。此の様に十法の小煩惱地法が特別に、單獨に心に結びつくものとして數へられたのは、恐らくは、此處に列擧されて居る様な働きをする惡心や煩惱心が實際生活に最も多く見られるからであるかと考へられる。其處で、此點から、考へると、上に述べた心所法で成立した煩惱心や惡心は、煩惱一般及び惡心一般の共通の心で、此を更に個別の煩惱心や惡心に

具體化するものが、此の小煩惱地法の一々であるとも見られる。

心所法の最後に不定地法と言ふのがあつて、此に惡作・眠・尋・伺・貪・瞋・慢・疑の八法がある。此も單獨で各種の心に結びついて、心の働きを制約するものである。此中の惡作と言ふのは、先きに自分のなしたことやなさなかつたことについて後になつて後悔する心情である。此は善心に結びついて、例へば惡事迄悔して改める惡作心になるし、惡心に結びつけば、例へば盜みをしなかつたことを殘念がる惡作心となるのである。次に眠と言ふのは心を闇昧にして對象物を明らかに識られない様にするもので、是は無記心・善心・惡心・煩惱心の四種いづれにも結びつくものである。眠は實際には心の働きを重くして眠らせるものであるが、眠くなることをば一つの心所の働きとして居るのは印度的の様で甚だ興味深いものがある。尋は心をしてものを尋求觀察せしめる働きであり、伺は尋よりも更に細深な觀察をなさしめる働きで、此も善・惡・無記・煩惱の四種の心に結びついて夫々の意味の尋求觀察する心を成立さすものである。貪は、身體や財寶に心を貪着せしめる働きで、既に得たものは手離すことを拒み、未だ得ざるものは是を得やうと執する

ものであるが、此は煩惱心と惡心にだけ結びついて、煩惱心としての貪心及び惡心としての貪心を成立させる。又貪と同様に煩惱心と惡心に結びつくものに慢と疑がある。慢は自慢高慢の慢であるが、佛教では此慢を慢・過慢・慢過慢・我慢・増上慢・卑慢・邪慢の七種に分ける。初めの慢は相手に對して自負して自己を勝れたりとするもので心る高舉にするものであるが、次の過慢は他と同等なのに勝れたとすること、慢過慢は他の自分より勝れて居るのに自己を勝れたと思ふこと、我慢は自我を執すること、増上慢は未だ道を得てないのに得たと思ふもの、卑慢は自己が相手より勝れて居るのに殊更に劣つて居ると卑下して内心慢するもので卑下慢とも言ふもの、邪慢は惡をなして成功して心が高舉して居るものであるが、心をして此様な種々な慢心になさしめる働きが此處に言ふ慢である。疑とは、猶豫性とも言はれるもので、心をして道理や眞實とせられるものに懷疑するやうにする心的働きのものである。最後に瞋があるが、此は惡心にのみ結びついて、惡心としての瞋心ならしめるものである。大善地法の中の無瞋の正反對の心情で、心をして、我に執着して他を嫌ひ憎み侵害しやうとせしめるものである。

ビ ル マ 雑 記

—江守八重子さんにうかゞう—



晩秋の或る日、鎌倉大佛殿に於て江守八重子さんにお會いする機會を得た。江守さんは貿易關係のお仕事で御主人とともにビルマに一年有余生活され、先般日本に歸られた方である。現在ビルマには二百八十人程の日本人が各方面で活躍しているが、江守さんはその日本人會の會長もつとめられ諸事に亘り御世話をなされた。特に本年五月渡緬した留學僧に對しては氣候風土の異なつた馴れない土地での生活にさぞ不自由のことでしょうと親身になつて御世話下され、歸國される前日には留學僧の方々を招いて、故國の香り懐しい味噌汁を作つて御馳走し、一同を慰め元氣づけて下さつたということである。海外生活の経験も豊富で、極めて視野の廣い國際人であるが、今度も御婦人の眼に映じたビルマの事情を、卒直に忌憚なくお話していただいた。

ビルマは何といつても佛教國ですね。産業文化教育等の各方面に亘つてみても未だ後進國の域を脱しません。佛教に對しては國民全體が心から信仰を持っています。かれ等が

お寺のために働いているといつても過言ではないでしょう。パゴダには毎日のように參拜し敬虔な祈りを捧げますし、自分の商賣が繁昌したからといつて金を寄進するといつたように絶對の歸依をもつて生活をしています。僧侶の生活は、御存知のごとく積極的に社會に進出して民衆を善導し明るい社會を建設しようとする日本の僧侶の方々と違つて、嚴しい戒律を遵奉して三千年前のお釋迦さまと同じ境涯を體驗しようとするもので生活も非常に消極的です。朝六時頃と十一時頃の二回だけ食事して午後は一切口に致しません。そのためか胃潰瘍が多いようです。僧侶の生活には臺所がなく托鉢することにより生活を支えています。黄色い布を身に纏い黒い鐵鉢をもち托鉢に出かけるのですが、午前十時頃はさながらオンパレードの觀を呈します。托鉢と申しますと、私達は日本の乞食的生活を考へますが決してそうではなく、一人一人に決つたスポンサーがついて僧侶の生活を援助するのです。民衆の人々は、僧侶に供養する食事はちやんと自分達のもものと區別して用意し

決して余物を差上げません。ですから一定の所にしか托鉢には行かず、又たゞ出かけても供養はうけないのです。日本から行かれまして留學僧の方々も一人一人にスポンサーがついてその方々が生活の一切を面倒みて下さっているのです。

私もたびたびバゴダには参拜しましたが、金色にサン然と輝くその美しさに比して建物の周囲の穢さです。参拜するときは素足になるのですがビルマ名物のノラ犬が處々にフンをして居り足の踏み場ありません。日本のお寺の幣のあととすがすがしいのとは雲泥の差です。元來掃除は卑しいことでクローリーにする事とされていますので、僧侶は全然しません。その點日本からの留學僧の方々も、酷暑の中勉強ばかりしているので掃除でもすると氣分轉換になるのですがとコボして居られた程です。何れにしても佛教の勢力は大變なもので僧侶の權力も絶大でその發言によつて事が進んで居ります。僧侶の方が亡くなりま

れ程佛教に對する物心兩面に亘る援助も大したものです。

一方ビルマの國として見ますと、決して樂觀は許しません。現在物價はその殆どが輸入品のため非常に高く現に外貨も不足している状態です。政治經濟の面では社會主義の形態をとつていますが仲々思うようには行つていないようです。私が街を歩いていて大變立派な機械が雨ざらしになつてゐるのを處々で見るので不思議に思つて尋ねたところ使用方法が分らないためにそうしてあるとの事でした。それならば莫大なお金を投じて買わなくてもよいでしょうと申しましたら政府の政策上又役人の職務上買うとのことでした。そこに技術者を養成するとか何らかの手が打たれて然るべきですがその點計畫的な仕事がないのは不幸なことがす。ビルマは勿論農業を主體とした國ですがそれに並行して工業力が發展しないところにビルマ國の後進性が感ぜられます。しかし日本に比して羨しいことは土地が非常に廣大なことで今後政策面で長期の企畫を立て技術的改良が加えられるならば多いに將來期待される國だと思ひます。

會員だより

竹中信常様

十夜前にて心忙しく失禮いたし居ります。

其後御無沙汰申上ました御多忙の御事と御推察申上げます。扱先般、淨土九月號に寛雅の母と子供の事お尋ね頂きましたにつき一筆御返事御記載願度如何でせう、取捨は御任せ申上ます。

私信で恐縮ですが九月號佐賀縣の方へ御返を御願申上度

× × ×

月日の流れは早いもので寛雅が過ぎましてはや五年、皆様に随分御心配頂きました孫も、長女は高校二年、次女由佳子は中學二年へ毎日登校には自轉車に乗せて通わせて居ります。皆佛恩に感謝いたして其日々を過させて頂いて居ります誠にありがとうございます。

埼玉縣鴻巣市

勝願寺内 藤田浪

座 談 會

今年の宗教界を顧みて

編 輯 部

戦争が終結して十年、いまだにあたたかな平和のひかりは私たちの眼前に訪れそうにもない。一步步々暗い不安の足音が現代の生活を混乱に追いこんでいる。このような社会的な動搖を背景にして、今年の宗教界の動きも又めまぐるしいものがあつた。しかし相も變らず表面のお祭りの會議が多く具體的問題の實踐は今後に残こされ

ている。

おし迫つた年の瀬を迎えて心せわしい中に、編輯部は今年の宗教界の二三の出来事について以下並列し座談してみた。

S 今年四月、セイロンのマララセケーラ博士が英文の世界佛教百科辭典の編纂に關する打合せのため來日したが、

K セイロン政府の要請によるものでこの編纂についてはマ博士も非常な熱意を示して居り、とくに大乘佛教の部門は是非とも日本で編纂するよう主張している。日本佛教會としても幾多の困難も予想されるが、大乘佛教の世界進出の上からも絶好のチャンスなので引受けることだろう。

T 引受けるというより、既に東洋大學に事務局が設置されて若き佛教學徒の手で着々準備がなされていく。セイロン政府から五百萬圓とりあえず編纂費として送つてくることになつていくのだ。これは難事業だが、その努力如何によつては日本佛教の國際運動としての成果が非常に期待されよう。

K 六月二十八日には、法然上人の七百五十年御忌記念傳道開始

式が行われたね。

T 昭和三十六年に七百五十年の御忌を迎えるわけだが、その記念事業の内容をみると、上人の遺徳の宣揚に關するものは、先頃刊行された石井教道博士の昭和新聞法然上人全集があり、このほか信徒用聖典の刊行、法然上人の撰述を中心とする布教師用法話集の刊行、現代語及び英譯の法然上人傳文藝による法然上人傳などの刊行が予定されている。

記念傳道については、視聽覺傳道の推進、記念五重及び授戒の奨励、布教コンクールの實施、それから海外派遣布教師の養成、記念傳道隊補助員の養成、寺庭婦人及び信徒による聖典讀誦研究會の結成などが主なるものだろう。

S 開始式當日は各管長全國の教區長布教師等三百名もの多數が參列した。神居管長の青年時代の布教活動について聲涙しぼる話は一同の心を打つた。

T それにつけても合同團結の速かならんことがねがわれるし、青年宗侶の結集が何より要請されるところ。

K その意味で六月廿五、六兩日京都知恩院で開かれた兩派共同

主催による、淨土教學大會は非常に意義があつた。一切の感情をぬきにして東西の學者が一堂に會して研究發表をなされたということ、今後のあゆみよりの上に大きい効果をもたらすだろう。

T 八月だつたと思うが、下中彌三郎氏の提唱せる世界宗教會議が麻布の國際文化會館で外國出席者も多數あつて盛んに開催された。

S この會議には、佛教關係からの出席者は案外少なかつたようだが、この會議で決議されたことは、世界宗教連盟の結成の件、八月六日を世界宗教共通の國際平和祈念日とすること、國際紛争の平和的處理の決議及び勸告に關する件、原水爆の使用禁止、軍備撤廢に關する件、地域的紛争と良心の自由、人種的偏見と差別待遇の撤廢の件、等であつた。

K 宣言には、宗教的な愛と寛容の心をもつて、恒久平和を樹立するため、國境を超え宗教宗派の別を離れて一堂に會し、心を協せて熱烈なる意見を交し、協力を誓い現代社會に對する宗教人の本務に精進し世論に訴え明るい世界建設のために協力邁進しよう。と

いつている。

T この世界宗教會議にも幾多の問題がありそうだね。そこに具體的問題を推進していく力がないことだ。

K それに前後して、八月五日には廣島宗教平和會議が市内ザビエル記念館でマライの宗教大臣スワミ・サチャナンダ博士ほか東西アジア五ヶ國代表十二名と國內の代議員が約二百名參集して「地球を死の靜寂にかえず原水爆の製造使用を食いとめ光明樂上の世界を建設する」ことを議題にあらゆる宗派を超えて活發に討議された。

S 宗教宗派を超えて、世界平和の祈りを捧げたのち、マライ宗教大臣は「世界の人々は全知全能の宇宙精神のもとに結合し、宗教的な力をもつて原水爆の製造使用をやめさせよう。」と語っているがこの切なる希いのおとづれの一日も早からんことを祈りたいね。

T 十月には學會でにぎわったね。まず、東京では十四日から三日間日本宗教學會が東大で開かれたし、京都では二十二、三の兩日佛教大學で日本印度學佛教學界が催されたが、兩學會とも百數十名の學者が日頃の研鑽を發表し、仲々盛大だった。

K 京都の佛教徒會議は十月廿九日に大雲院佛教會館で開催され各宗各派の佛教徒約三百名が出席して「佛教の現代化」など種々の問題を討議している。

S 佛教の現代化の問題について。

K 佛教が從來、時の權力に結びつき近江絹糸事件に表われた如く、封建的なものに加擔する傾向があつた。この點を反省し主體性をもち、時代を指導する力をもつべきである。というのだ。又、現代化は大衆の悩みとともにあるものでなければならぬ。という意見を出したし、佛教の教義、戒律が現代に生きるか、まず根本的に考えねばならぬ、とか色々の熱論がつゞけられたが、結局現代のあらゆる問題に對處するため佛教徒がしなれば集つて研究すべきであると提唱されたのだ。

T 新興宗教の問題に關しても東大の小口偉一氏より説明があつて、新興宗教の起るのは社會的不安によるものであるが、佛教徒としては自體の教化活動を活發にし正しい信仰を擴めるべきだとの結論に達したようだ。

K 新興宗教といへば、今注視の的になつている創價學會の秋の

總會が十一月三日に、東京の後樂園スタジアムで開催された。參集者約七萬といわれている。なにしろ全國の會員三十萬家族突破だそうだからね。入場式なども樂隊の奏樂で日本男子の歌を拍手で調子をとりながら歌い出されると、二十六の隊旗を並べて青年部隊が入場行進、ひきつゞいて日本女子の歌で同じように二十六隊の女子部隊が入場するといつた、全くファッショ調だよ。

S そして、口を開けば、創價學會は唯一の正しい宗教である。邪教である全宗教を撲滅して明るい世界を建設しようというのだらう。

T 全く現代社會の病的な缺陷の起因するところだらうが、それにしては前途有爲の若者が踊らされていくということは氣の毒だね。歸趣を失つたかれ等を導くべき強力なる理念が今こそ打出されねばならないと思う。

K 十一月四日から三日間身延山に於て、全日本佛教徒會議が開催されたが、四百數十名參集して盛大だった。今迄に二回開かれたし、一應學性格が全宗派の總合として特徴づけられている以上、最大の日本佛教徒の公式會議として

みなされることはきわめて意義が重要だと思ふ。

S しかし、佛教の現代化なるぼう大な議題がひつぎげられてあつたが、何故このような抽象的な問題が問題とされて、現實の宗教界の當面する重要問題とならなかつたのだらうか。

たとえば神社法の別置論が叫ばれ、自衛隊内の神祠、忠靈碑建設を契機としてすでに國家神道復活の動きは始まつているのに何らの論議がなされなかつたのだ。

K 結局、この會議も幾多の問題をかゝえながら現實足下の具體的な問題への實踐という點からはかけ離れて、形式會議のお祭り騒ぎと化したきらいもないではないね。

T 今年には政府の新生活運動の提唱ということもあつてか年末年始の虚禮廢止の傾向があるようだが宗教の新生活運動はどうなつたのだらう。

K 最初全日佛あたりでも五戒に基く宗教界獨自の新生活運動を推進しようという意氣どみであつたが、その後思うように展開されていまいやうだ。各宗各派の本當の意味で協力一致がなければ燃え上りは困難であらう。

昌光律寺

を訪ねて



大橋 俊雄

「不許葷酒肉入門」「僧律大儀」と彫られた石標に目をやり、山門をくぐれば掃き清められた雨あがりの境内は清幽にして、塵一つさえもとめない。何か奥床しい氣が寺一面にたちこめている。寺らしい寺と云つた感じが身にひし／＼とせまつてくる。

寶曆二年（一七五二）徳嚴は額田郡伊賀村の地に一字を結び大槌庵と名付けたが、同じき十三年に至り、近くの伊賀八幡宮の神主柴田中務勝興の請に依つて松林院に移り念佛持戒を弘通したのであつたが、更に舊地大槌庵を改築して昌光律寺を開創したのであつた。時に明和二年（一七六五）の事であつた。由

來此の寺は三河に於ける淨土宗の律院として

重きをなし、道化頗る盛んにして四衆隨喜しために參集する者も多く、從つて此處から輩出した名僧も可成りあつた。開祖徳嚴和上は道徳をもつて世に聞へ、七代萬空は持律堅操にして詩文をよくし、菅茶山・頼山陽・岡本花亭等の文人と交はつたが、中にも月僊上人との道交は深く、或時は風月を談じ、或は道義を問うたと云はれ、今に此寺には畫僧月僊の畫いた涅槃像・祖師像などの畫幅は凡そ六十點を數へている。此等の畫は愛知縣文化財としての指定をうけているが、その繪たる廣く元・明の畫道を探り、又蕪村や應舉の風を

考へて一新機軸を出しただけに、作品そのものに氣品の高きものがある。一名月僊寺の稱へのあるのもこのためであるが、人々から乞食月僊の異名をとつた彼も、頼まれれば喜んで畫を書きあたへ、集まる所の筆料を以て堂宇を修め、貧民救濟橋を架け道路を改修し、慈善救濟の事業につくす所大であり、金を私するようなことはなかつた。

刺を通ずればあいにくと御住職は不在との由であつたが、近隣の律院に住する律僧は心よく招じ入れられ、茶菓のもてなしを受けながら種々と律院の在り方、歴代住僧の逸話等々諄々と話され知識を深くされたのであつたが、その話にもれた建立の経緯や昌光律寺の定規・別軌等開創當時の記録を所持する私は大樹寺寶庫で探したばかりの新資料を提示して、律院生活にふれたのであつた。律院では肉食妻帯はおろか、色衣を用いることも許されず、鼠の衣に讀經と教誡律儀の研究を豫儀なくされ、墓地を城内に設けることすら戒法にそむくといふのである。戒法によればお金を手にすることも出来なかつたし、眼の置き場所についても厳しい掟があり、それを如法に守ることが律僧にしいられた義務とされている。

「大樹寺文書に依れば、此の寺が建立されるに當つては、大きな期待をもたれていたようです。というのはもと大樹寺には五十五ヶ寺の末寺があつたが、時代の變遷につれ明和二年の頃には十二ヶ寺にへつてしまいました。所がその頃徳嚴和上が律院創立を増上寺に願ひ出たのですね。増上寺の時の法主は妙舉大僧正でした。此の度志願の昌光律院の建立は極めて結構なことで、予の期待する所も大きい。喪失した大樹寺末山寺院四十三ヶ寺分の教化弘法する寺院となつて欲しい。このような希望を以て創立されたことは、一重に開山上人の徳化のしからしめた所だつたのでしうね」

「全く徳嚴和上は持律堅固な、學徳共に高い僧侶だつたようです。その和上も始めから此處に昌光律寺を建てたわけではなく、寶曆二年和上が自から建立した大槌庵を再興したと聞いています」

「そうですか、昌光律院の名稱については『昌光律寺の規約に、依徳嚴律師創建三志願適公聽、三州額田郡瀧村曹洞宗萬松寺末昌光寺之號を同郡伊賀村江移し、當山末寺淨土律院二相定軍』とありますから、その名をついだわけですね。最も此の時代には新寺建立は

許されていませんでしたから、建立を見るに當つては何等かのからくりがあつかも知れませんが。その良い例は關通上人ですよ」

こんな會話をかわしてから後、規約でもあればと思つて聞いても見たが、日々の差定行事の記されたものはあるけれども、律院生活を規定したものは別にないらしい。あるとすれば其れは四分律とか教誡律儀がそれに當るのであつて、和上ともなれば常にそれを讀んで居らなくてはならないといふ。従つて和上様といへば大した高僧と云へるのである。住職の中には和上を名乗るもの八人、律師と稱している者三人を數へているが、これは律院僧の階級の差で、和上は進具を受けなければなることは出来ない。進具は、一ヶ月とか百日とかの行を願ひ、満願の折、佛のお告げを受けた者のみ稱へることの出来る僧位であるが、一度び行場に入つた場合、待從のものが食事その他の取り次ぎをなすことになつてゐる。「まあ、物いはぬ本尊なのでしうね」と其の人は語つて居られた。

今でも此の寺には七人の僧侶が住んでゐるというが、昔ならば「一人出家すれば、七族天に生る」と云はれた佛法の地だけに俗家より入るものも可成り多かつたらしい。しかし

現在の多くは兩親を失つた孤兒や寺院の子弟で修養のため掛錫してゐるものが割合多數を占めてゐるという事である。住僧は如法に修業することを以て使命とし、經濟面にタッチすることは律制にもとることになる。それなればこそ、古の住持はお金がなくなれば、八丁味噌の本家に行つては金を借りたものらしく、その借金證文も積もり積つてうず高く残されてゐる。例へ借金をしたとは云へ、それが容易になされたところに當代人心の大らかな、しかも信仰心の厚かつた面影を見得ることが出来るのである。それを今に適用するとは、古今の異なる社會においては不可能なことであり、現在は七軒の檀家と、信仰に生きる有縁無縁のお祠堂金の志により生活させていただいてゐるということである。

何時か時を忘れて話して居れば、しと／＼降り出した雨もいつしか止み、彼方の寺では暮六つの梵鐘の音が響きわたつて來た。早速に暇を告げれば、堂下に降り住僧は開山上人及び杉山大運和上の供養塔に案内して下された。

開山の塔を大寂塔、和上のそれは一寶塔と云うのだそうだ。勿論此の塔は供養塔であつて、墓地ではない。律制では門内に死骸を葬

むることを極力いましめ、墓地は門外にしつられ、必要ある場合、慕敬の切なる時には坊内に供養塔を営むことをならはしとしてゐる。この塔はよき例であらう。杉山大運和上は護法扶律を以て己れが任とした持戒堅固な近代の高僧で、一實塔は和上の名附けたものゝ由。しかし其の設計は和上の縁戚に當る石田茂作博士がなされたといい、その銘には

和上俗姓杉山氏、萬延元年一月八日生●△
於岡崎板屋町。年甫九歲基上人薙髮得度。
後嗣志運和上資董、昌光律師第十一世。持
戒堅固、住寺七十四年、昭和十九年三月十
日寂、壽八十五。

ときざまれていた。三河の律院維持に功のあつた明治初期の律僧志運和上も此寺の出であるが、その律院も今に命脈を保っているのは少ない。少ないとは云へ新鮮の氣を、或る意味で教界にあたえてゐることは否定出来ない。否、今日の萎靡沈滞せる教界に清涼の氣を興へることは急務であり、寺院本來の姿にかえることこそ最も望ましいことで、その役割を三河淨土律院が叫んでもよくはないかと思つて見たりもした。そして清淨な境内をあとに、再び俗塵にまみれた電車通りを大樹寺の宿舎にと歸途についたのであつたが、聊かなりともこのような清新な氣風にひたり得たことを喜んだのであつた。

想 隨

親え忠言

子は三界の首枷、子程厄介なものはないだろう。だからそれだけ望みも、期待も大きかる。おどしたり、すかしたり、何とか俺の望みをこの子によつてと考へる。だが考へるべし。育兒文化型ということ。

生涯の最初の數年間に、成人してのパースナリティーの深層が形成される。これは今一般に認められてゐることである。

特異な個人を研究した。その結果、その個人の特異性のあるものが、常にある特異な幼兒期の經驗に結びついてゐる、ことを發見したことによる。

これは本能的な因子によるものではないことが分つた。これがある人が育兒文化型と呼んでゐる。

石川五右エ門の父親は、とても氣が弱い倅を強く育てようと思つた。それには俺は強いんだという處を見せるに限ると考へた。何が、いゝだろうと考へる。物取りがいゝ。女房には、いつもお前さんが意氣地が

ないから、子供にひもじい思ひをさせる。さうだ追はぎをやれば、一舉兩得だ。ある日五右エ門をつれて野原に出た。一番弱さうな盲目を斬つて氣を失つた。こんなことが眞説「石川五右エ門」に書いてある。世間の親達は單純な氣持で子に接することとは出来ない。幼兒は幼兒にして幼兒ではない。

あまりにも嚴しい家庭に育つたものは、成人しても、自分は何かに拘束されてゐる妄想にとりつかれる。服従を強られて育つたものは常に何ものかに服従していなければ生きられない。こんなことになる、かも知れない。

私など毎日父親に抱かれて、朝夕の勤行に出た、とのことだ。だから大宗教家になるかも知れない。これはまだ未知數である。T・Sミルは三歳にしてラテン語を學んだ。彼は大學者になつた。

とにかく世の親は心して育兒の文化型をもたねばならない。

子をもつ親は必ずや、子の立派な成人を念願してゐることであらう。されば子に自分が反映することを思つて、子の成人より先に自分の成人に留意すべきである。

私は親に意見するの心更になきことを附言する。

和田合戦

(下)

鶴田湛泉



義盛に謀叛の下心ありとの世上の物論が餘り騒然となつて來たので、

「怪體な噂ではある、すてゝ置かれぬ」

と、實朝は、橋公キシウケ氏を使者として和田の宅に赴かしめ實狀を探らしめることゝなつた。

義盛は使者に逢ふため客殿へ出て來たが、その時どうした拍子か冠つてゐた鳥帽子が公氏の前にバサリツと抜け落ちてしまつた。それがまるで首が落ちたやうな恰好であつた。

この容子を眺めて、苦笑を壓へて、

「若し事をあぐるとするなれば、これは正しく誅戮に伏する前兆であるわい」

公氏はさう心中に思ひながら、

「近頃幕府へ出仕致されないのは、いかなる理由でござるか」
將軍の趣を述べて義盛の心中を訊ねた。

「されば、われ亡き頼朝公の恩遇を蒙つて云つてきかれないことはなく、許されないものはなかつた。それに故將軍世を去られて未だ十年にならないのに、自分の云ふところはきかれず、請ふところは何一つ許されず、これでは世に立つ面目もなき故出仕いたしませぬ。叛を謀る心などはございませぬ。只自分の退運を恥ぢ入るばかりでございまする」

別當は御家人の統率進退を職掌としたもので、その地位は頗る重く威權は盛んなものであつた。それがいかに時勢の推移とはいへ、己が權力の微弱となりつゝあるを老の目をしばたゞいて訴へた。

しかし邸内を伺ふと、保忠、義秀等がしきりに武器馬具の手入れにあわただしく、兵を檢閲してゐる容子にたゞならぬうごめきがうかゞはれ、公氏の目にも出陣の用意とさへ思はれた。最早や謀叛の形勢歴然であると察した公氏は倉皇として義盛の邸を辭し歸ると、容易ならぬ實狀を復命したのであつた。緊張した幕府は、ともあれ直ぐ鎌倉在の御家人を召集することゝなつた。

切迫した空氣に其の夜、藤原忠孝が再び使者となつて、

「近頃、和田氏が兵を擧げようとしてゐるとの噂しきりであるが將軍家は、その事についていたく驚かれ心をつかはれて居ります。先づ蜂起を思ひ止められて恩命の沙汰を待たれたがよろしからう」

と、義盛を諭し兵をとゞめしめようとした。

「私、幕府に怨あるものではありません。たゞ子弟の輩、近頃の義時の所爲餘りに傍若無人の故に子細を尋ねるため發向せんとしてゐます。しばし、諭しましたれどき入れられず、衆議既に一決して居ります。私の力のよく制するところではありませぬ」

平靜に述べようとする義盛の語氣は、いつしか悲調を帯びてふるへ、胸の奥では憤怒を沸らせてゐたのか殺氣をさへ含んでゐるやうであつた。充血した兩眼には、悲憤の涙さへ光つてゐた。

二

建保元年五月二日、やらうやらねばならないと決意を固めた義盛一族は、終に戈を執つて起つた。賴朝業を創めてより三十年、鎌倉の地忽ち修羅の巷と化せんとした。

關東の大豪族として強大な勢力を持つてゐた三浦義村は弟胤義と共に義盛と結んで共に事を擧げんと堅く誓つてゐたが、俄に變心して義時に、

「義盛謀叛を企み早や出陣と思はれまする」

既に危機の迫つてゐることをありのまゝ告げた。

その時、義時は客と碁を圍んでゐる最中であつたが、變を聞いてもうなづいたのみで、毫も驚き動ずる氣配もなく、尙も勝負を心靜かに目算して後、やつと座を起ち悠々と折鳥帽子を立鳥帽子に改めて水冠を裝ひ幕府へ赴いた。

同じ頃、義盛の近隣に居住してゐた左衛門尉朝重は、和田の館に軍兵競ひ集るたゞらぬ容子を眺めて一刻も早く告げねばと、大江廣元の邸へ急いた。

廣元は賓客と夜宴の酣であつたが、變の知らせを受けると愕然と杯を置き、餘程あわてたのか、客をそのまゝにしてあたふたと幕府へ入つた。

幕府では、忽ち鼎の沸くが如き騒ぎとなつた。よもやと十分な警固の備へもなかつたことゝて、政子は實朝の北の方と共に難を鶴岡

別當の坊に避けた。

手をこまねいて自滅を待つよりはと、和田義盛大將となつて、嫡子新左衛門常盛、同子息新兵衛尉朝盛入道實阿、三男朝比奈三郎義秀、四男四郎義直、五男五郎義重、六男六郎義信、七男七郎秀盛、この他、土星義清、古郡保忠、澁谷高重等、親族朋友百五十騎、郎黨合せて三百餘人三手に分れて押し寄せた。

今は何の逡巡するところなく義時討つべしと心を定めた朝盛入道實阿は將軍と戦ふのではない、専横な北條と戦ふのだと、名分を明らかにして自分に云ひきかせながら、慈悲の化身として振舞ひ、地藏の權化として戦はんと、墨染の衣に甲冑をよろうて「これぞ初陣ぞ」と、彼の目は爛々として輝き奮ひ立つてゐた。

申刻（午後四時）一軍は幕府の南門に押しよせ、二陣は義時の小町の西北の兩門を取り圍み、他は廣元の邸を襲ふた。

義時は將軍の御陣法華堂に伺候してゐたことゝて、留守居の侍五十餘人「すわッ」と應戦して防ぎ戦つたが衆寡敵せず殆んど傷き討たれてしまつた。

やがて義時と廣元の屋形を攻めて引擧げて來た兵は相合して一となり、酉ノ刻（午後六時）四面から幕府を攻め立てた。

旗をなびかせ、弦鳴り矢うなりを生じて猛襲した。

「叛徒をうち平げよ」

「寄せくる敵を蹴散らせ」

双方矢を發すること雨の如く、鋒より火を發し、鐔元に血を滴て

互に追ひつ追はれつ或は退き或は進み半時計り攻め戦つた。

義時の長子泰時、次男朝時、足利義利等兵略をつくしてよく防ぎ戦つたので攻め入ることは出来なかつた。

この時、驍勇群を抜く義盛の三男朝比奈義秀、總門を打ち破つて「つゞけ者共」と眞先に駒をおどらせて突入すると、「われ遅れじ」「わあーッ」と一つの武者吼となつて矢を射かけながら、南庭になだれを打つて攻め入つた。

幕府に火を發したのか、見る間に黒煙が廣がり赤々と火を吹き手薄な幕府は火を消すだけの餘力はなく廊内室屋一舎も残らず焼亡してしまつた。

炎の渦巻く中を義時廣元は實朝を奉じて難を法華堂に避けた。

波多野忠綱先登に進んで防ぎ戦つてゐる中、三浦義村急をきいて手勢を率ひて馳せ加つた。こゝに於て、兩軍入り亂れて火花を散らして血戦となつた。互に身體と身體と相うつ追撃が行はれ戦はいやましい激烈を極めて來た。

三

六尺五寸、三十四貫の巨軀に二領重の大鎧をまとひ、星甲の緒をしめ連錢葦毛の馬を驅つて九尺許り二十貫に餘る鐵の大錫杖を片手でぶんぐ唸りを立て、振り廻して當るを幸に人馬をとはず打ち伏せ難倒し阿修羅の如くあばれ廻つてゐた大力無双の豪の者と音に高い義秀は、

「朝比奈三郎義秀これにあり、我と思はんものは参れ」と呼つてゐた。

この時、新町左近將監景直は、緋威の鎧を著なし甲鴛毛の馬に打ちまたがつて太刀を眞甲にかざして、

「よい敵」とばかり義秀に馳せかゝて來た。

「ござんなれ」

剛力の義秀、ハシツと打ち開くと、

「わあッ」と絶叫をあげてのけぞつたまゝあわれ新町の身體は血煙立てゝ馬から落ちてしまつた。

つゞいて馳せよつて來た葛野三郎盛重、

「いざ組まん」

と、錫杖の下をかいぐり弓矢を捨てゝいどんで來た。

「さうは組ませじ」と義秀錫杖を取り延べて馬を衝いたので、馬はドツと横さまに倒れ盛重下敷きとなつてしまつた。

「地獄へ眞直ぐぞ」聲もろともに義秀は渾身の力をこめて腦天からきめつけられたので、何でたまらう、甲の鉢共に首碎けてしまつた。

この容子を眺めて齒きしりした五十嵐小次郎憤怒の形相すさまじく、

「ウム無念なり、一騎打の勝負を思ふ故に多く討たれるぞ、大勢一度に前後左右より攻めつけよ」

と呼はり注意して郎黨七八人と共に、太刀をひらめかして我身も

ろともに聲に合せてワツと同時に打つてかゝた。

義秀例の錫杖を振り上げ向ふ様に小次郎の甲の眞甲をハシツと打つて來た小次郎太刀で受け流さうとしたが太刀に叶はず、棒で殴りつけられて首は胴もとえ入るかと思はれて落馬してしまつた。

この勢に怖氣にかられたのか、郎黨は馬首をかへして散をみだしに逃げ退つてしまつた。

次いで義秀に挑んで來たのは高井重茂であつた。彼は和田義茂の嫡子で義盛の甥であつた。彼のみは義盛に與せず一族から離れて幕府方であつた。大功を現はさんものと既に義盛の郎黨數多打ち取つてゐた。

何しろ騎馬戰に巧な坂東兵士同志の接戰である。右に駆け左に廻り火のやうな烈闘をくりかへしてゐたが、いづれにも勝負がつかない。

轡を並べて戰つてゐたが、重茂太刀を打ち折つたので、むんずと組んで雌雄を決せんと、折れた刀を捨ていきなり義秀の草摺に取りついた。そのはづみに兩人馬よりドツと落ち上になり下になりして、しばし組合となつた。

「おのれ小頼な」

馬から落されたことが餘程腹が立つたのか、重茂を押へて首を兩手で捻切つてしまつた。

ともかく義秀を馬から落したのは、この戰で重茂一人であると敵味方共「天晴れ勇士」と感嘆せしめた。

この時、味方の間を馳せ廻つて將兵を下知してゐた泰時の舍弟北條朝時（トモ）は、義秀が將に馬に乗らうとする隙をねらつて太刀をふりかざして打ち下して來た。「ガチッ」と鳴つて義秀は受けとめた。朝時は大力の義秀に受けとめられたので手はしびれる太刀を取り落し身に太刀先が當つて手負を負ひ「こは叶はじ」と馬に鞭して一散に逃げ出してしまつた。

足利義氏は、政所の前橋の詰で義秀とばつたり出合つた。

「よき敵ぞ、いざ推參」

義秀は、矢庭に義氏の鎧の袖をむんずと掴んではなさい。「これはしまつた」と思つたのか、義氏馬に一喝を入れると馬はおどり上つて廣さ二丈餘の堀を飛び越えた。義秀をふり返つて莞爾とほゝえんで突つ立つた。義秀の手にちぎれた鎧の袖がのこつてゐた。この容子を敵味方片唾をのんで見守つてゐた。

「待てッ」義秀堀を東の橋から渡つて尙も追ひかけた。主君の危機を見て足利の郎黨、追はせじと前を防ぎ戦つたか、義秀のため多く打ち果されてしまつた。その間に、義氏はやつと危地を脱するこゝとが出来た。

若宮大路米町の口で、武田五郎信光に出逢つた。

信光が義秀に追はれて既に危くなつた時である。信光の嫡男信忠十五才の少年ながら鎧響きさして父の前にかげ塞がつて、けなげにも太刀抜き放つて打つてかゝつて來た。夜叉のやうな義秀の猛勢に、花の姿が哀れ切りさいなまれるかと思はれた。

「かゝる少年を討つたとて何の譽とならう。父の命に替らうとする志の優しさよ、健氣なる振舞ひよ」
と賞めつゝ、可憐な少年武士を惚れぐと見とれてゐたが、莞爾として馳せ通つてしまつた。

四

花々しい義秀の奮戦は大いに和田勢の士氣をたかめたが、義盛の一族郎黨皆一騎當千の兵で、いづれも討死と覺悟を定めてゐたことゝよく戦つた。兩軍押したり戻したりして激しい戦のまゝ暮色に近づまれた。星を仰いでも止まない。戦は夜に入つて益々酣となり壯烈な夜戦がくりひろげられ相磨する激戦は曉に及んでもなほ止まなかつた。數度の戦ひに、北條方は新手を入れ替へ攻め立てたが、替る兵のない和田勢は、すでにおびたゞしい死傷者を出し漸く兵つき筋も窮つて半ばとなつた兵を集め疲れた馬に鞭うつて前濱の邊に引き退いた。

中下馬橋には、泰時初め足利義氏等の軍兵陣してゐたが、米町の辻大町の大路以下所々を取り塞いで敗退する和田勢を息をもつがせず攻め立てた。

明けて三日、小雨降るくら闇の中を戦は尙も激しくつゞけられ、泥土は飛び地は碧血に染まつた。人馬共に疲れ矢も射つくした和田勢は、兵を集めて陣を立て直さんとしてゐた。

ところへ寅刻（午前四時）横山馬允（シノ）時兼、その婿波多野三郎、甥

の横山五郎等一門郎黨三千を率いて腰越の浦から雨をおかして加勢に馳せつけて來た。彼等の着て來た義笠を一ヶ所に積み上げたので山をなしたといふ。

勢を盛り返した和田勢は、逆寄して武藏大路の間、稻村ヶ崎の邊に群がつてゐた北條勢を散々に追ひ散らし、その勢當るべからざるものがあつた。奮戦してゐた泰時も鎧に箭を受けてゐた。和田の猛勢に避易し崩れ亂れ初め、筑後の四郎兵衛、壹岐兵衛、土方次郎、神野左近等北條方の名ある二十七騎の勇士も次ぎ／＼に討死してしまつた。

猛攻する有勢な和田勢を防ぎ切れず北條勢は退却に退却を重ねてゐた。

土屋義清、いよいよ進んで將軍の避難所鶴岡別當の坊に打ち入らうとしてゐた。

騎虎の勢で若宮の赤橋の砌に馬を馳せた時、彼は突然、「ウム」と絶叫した。折から一筋の流れ矢が飛んで來て彼の頸に深く突つ立つたからであつた。

「無念」と齒ぎりして尙も馬を煽らせようとしたが、さすがの義清も目がくらんで思はず鎧を踏み外して地に落ちてしまつた。そこへ近藤左衛門尉走り寄つて難なく首を擧げてしまつた。彼は和田方の猛將だつたので、彼の討死が知れ渡ると、和田勢は一時に沮喪し初めた。

泰時、時房等分れて諸路を扼してゐたので義盛の勢進むことが出

來なかつたし、援軍を得て一時優勢を示した和田軍も、この頃から形勢俄かに不利となつて浮き足立ち崩れ出し、次第に撃退されて來た。

酉の刻（午後六時）となると、和田方の敗色既におほうべくもない。残り少なくなつた兵はいづれも具足に矢が立つてゐるのも苦戦の程を思はせる。義盛の子息八子のうち、義氏、義重、義信、秀盛、茂國と相ついで討死を遂げてしまつてゐた。

和田の本陣も、既に僅かの手兵しか残つてゐない。

あわただしく本陣に馳せ歸つて來た一人の郎黨は義盛に、「御曹司、義直さま伊具馬太郎盛重に討たれ給ひました」と息せき切つて告げた。

五

「ウム」

義盛愕然と顔色を變へ、思はず鐵扇を落しガクリと顔を伏せた。

和田隨一の猛將であり片腕とたのむ義直の討死に彼の落膽は一方でない。義盛ほどの武者も風情の世の親である。悲しみにこらへきれず愛情の念が燃えよつて、よゝと聲をあげてしばし悲哭してゐた。

早や手勢を失ひ孤影悄然となつた義盛の顔には絶望の色さへつき上げて來て鎧の袖で涙をおさへ、

「今は何をか期すべきぞ、命生きてても甲斐なきこの身」

「いざ参れ」

老いの聲をしぼつて單身敵中へ躍り出た。傍をはなれぬ家來達もつゞいた。

「和田の御大將を討つて功名にせん」と群り来る敵の中へ切り込み奮戦してゐたが、江戸左衛門尉義範の郎黨に組まれて首級を挙げられてしまつた。

保元の亂の爲朝、平治の亂の義平、和田合戦の義秀と勇名をとゞろかせ超人的な働きをしてゐた義秀は、まだ何の手負もなく當る敵を踏み蹴ちらしてゐたが、父義盛初め兄弟其の他多くの郎黨が討たれ、既に戦は敗れたことを知ると、

「今はこれ以上戦ひても詮なきこと、時節を待つて本懐を遂げん」

と、生き残つた郎黨五十餘騎を召き集め由比ヶ濱から舟六艘に乗り移つて安房國さして行方知れずになつてしまつた。

一方常盛、横山右馬介、古郷兄弟、和田新兵衛入道等は、一方の血路を開いて何處となく落ち失せてしまつた。

こゝに和田の軍は完全に敗北してさしも激烈を極めた一晝夜の戦も、大風一過漸く収まり亂は鎮定された。

幕府の和田の落人狩りはきびしかつた。一族は敗惨の身をこゝかしこにかくれてゐたが次ぎ／＼に捕へられ處刑され、又追はれ追はれて追捕のきびしさに嫡子常盛初め古郷兄弟、横山右馬介等は各地で自刃し果てた。

新兵衛入道實阿も捕へられ刑死したと傳へられてゐたが誤傳であつて佛門に身を潜めてゐた。

其の後、承久の亂には、正しい政治のあり方に力をつくさねばならぬと思つたのか和田朝盛入道は後鳥羽院に屬し、墨染の法衣に甲冑を着て花々しく戦つたが、安貞元年六月八日終に京洛で捕へられてしまつた。

會員の皆様えおねがい

暗い社會に、潤いのない私たちの心の中にともしびをかゝげ、憎しみ、怨みあう世の人々に愛のことばをかけて、明るい正しい社會を建設するために、「淨土」は一生懸命歩みを續けています。

しかし、道は遠くけわしいため、どうしても皆様の變らぬ助成がなければ順調な輕快な歩みは續けられませんが。

會員の皆様、「淨土」の力強き歩みのために、會員愛讀者の入會をおすゝめ下さるよう切におねがい致します。



お佛壇と戒名

—新興宗教讀本 その四—

竹 中 信 常

一、本尊を焼く

「創價學會員またも暴行、妙道會の下部組織を荒す」これは、本年（昭和三十年）春、大阪の妙道會（靈友會より分派獨立したもの）の系統長宇都野貞司氏宅を襲つて、亂闘の結果、宇都野氏に五日間の傷を負わせ、表ガラス戸などを破壊したことを、同じく、新興宗教關係の機關誌「新宗教新聞」が、六月五日（第九二號）附で報じた記事の見出しであります。

小樽問答のことは再三觸れて來ましたが、今回は、宗門に對する、集團的な折伏に並行して、個々の家庭を相手とする折伏について述べてみたいと思つて、先のような見出しを引用してみたのであります。ところが、つい最近の、而も、少くとも日本の三大新聞の一つといわれる讀賣新聞の週刊紙「週刊讀賣」（十月三〇日號）に、またまた、二つ

の事件が報道されております。その一つは、沼津市で、二十年來、佛立宗を信仰していた駄菓子屋のおばさんの所へ近所の、創價學會員が二人追しかけて、改宗をすすめたがいうことをきかぬので、佛壇に飾つてあつた日蓮上人の木像を奪つて引上げ、ドブの中にすててしまつたという事件。もう一つは、福島縣相馬郡石神村で起つたことで、村の共有建物である觀音堂を創價學會員と稱する七人の部落民が、こわしてしまつたことです。

このように、新聞記事になる以外にも、これに似た話は随分方々から耳に入ります。一體何故こんなことをするのでしょうか。

創價學會の場合には、日蓮正宗の本尊が、日蓮上人眞筆の（弘安二年十月十二日の）マンドラ以外は全部邪教だという、宗のきまりなので、ほかの本尊は一切破棄すべしということで、時に暴力に及ぶことになるのです。然し、理

由のいかんを問わず、暴力を用いるということは、特に、信仰を云々する集團にあつては、絶対に許されません。

また、暴力に訴えぬにしても、色々と、因縁話や、罰のおどかしで、強制的に本尊をかえさせるのも、許るされないことです。

本尊をかえることのほかに、もう一つ、戒名をかえることが、これは、最近少し下火になりました靈友會や、立正交成會では行われています。ひところ、靈友會の盛んだつた頃には、お寺から貰つた戒名をかえることと、親類中の顔も見たとともに、名もきいたこともないような人の戒名まで、お寺で書いてきて、これを靈友會の過去帖——靈鑑——に書きならべることが流行しました。何故、「戒名をかえるのか」というと、菩提寺でつけてくれた戒名では、佛が浮ばれない。靈友會なり、交成會なりの「法式にかなつた」戒名でなければ駄目だというのであります。もともと、靈友會でも、特に交成會でも、その教義の中に、姓名判斷的な要素が多分にあります。つい先年、「藏敷事件」という名で有名だつた、子供の名が悪い。そのまましていると何年以内には死ぬぞとおどかされて、母親はそれを心配した餘り子供と一緒に自殺してしまつたという事件は、全く、この姓名判斷の邪惡な反面をありありと物語っているものといえます。それならどおすればよいのか。これは各教團によ

つて、それぞれ、尤もらしい理窟をつけていますが、ここでは靈友會のを引用してみることと致しましょう。

二、靈友會の戒名

靈友會信者の佛壇をみますと、中央正面に、

諦生院法○○○德信士
信女

または

諦生院法○○○德善士
善女

などと書いた紙がはつてあります。靈友會では、戒名はすべて院號づきです。そして男の場合は法……信士（又は善士）女は妙……信女（善女）となります。○○にはそれぞれ適當な字を入れます。但し此場合、字畫が偶數奇數と交互になるようにするのがミソらしいのです。ですから、お寺でどんな戒名を貰つても、この方式に變えてしまわれるのです。そうでないと、亡つた人の靈が浮ばれないということです。お寺の和尚さんの引導では、駄目だというわけです。

この戒名をかえるということには、一寸した心理効果をねらつた點もあります。從來のお寺では、院號というと、格式あるものとして、そう簡單にはつけません。餘程信仰の深い、平常寺のために盡力していた人のほかは、そうざ

らにはつけてくれません。ところが、人間はえてして見榮を張りたがるものですから、自分の家の佛には、成るべく長い戒名をつけて貰いたいと思います。お寺で仲々つけてくれない院號を、靈友會や交成會に入るとすぐつけてくれるのですから、何となく、ありがたくなるわけです。それにもう一つ、人間という動物は妙に名にこだわる癖があつて、名前と本體とが一つに感じられることがよくある。そんな時、新しい信仰に入つたのを機會に、戒名も改めると何となく身心共に一新したように感じられて来る。「御先祖の戒名が變つたぞ、さあ、これで私も靈友會の會員だ」という自覺が出る。仲々、人心の機微をうがつた商法といふべきであります。

戒名に關連して、餘談になりますが、靈友會で發行している戒名帖、即ち靈鑑なるものが、馬鹿にならぬ力を持つてゐるのです。會員になると同時に、經本や珠數や禪と一緒に買わされるのですが、これが團の資金面に可成り役立つてゐるらしいのです。つい本年の夏のことです。靈友會以外の新興教團が結束して訴訟を起しました。それは、靈友會が「靈鑑」を意匠登録して、他の教團で作られないようにしたため、從來、これと類似の靈鑑を使つていた他の教團がふんがいたのです。靈鑑は靈友會だけで獨占すべきでないといふのです。その結果がどうになりましたか知り

ませんが、あの横に廣い、獨特の形の靈鑑が、各教團にとつては、仲々に大切な役目をしてゐることが、これでわかります。

三、戒名の意味

さて、それなら、戒名は變えていいかどうか。いや、その前に、戒名とは一體何だろうか。このことをよくわきまえてさえいれば、何の問題もないわけです。

戒名とは、佛教の戒を受けて、佛教信者になつたしるしにつけるもので、キリスト教のクリスチャン・ネームと大體同じようなものです。世間で一般に考えられ、また現在では實際上也そんなつてゐるうちに、死んでからつける名ではないのです。普通の人は、戒名というと、死んでからつけるもので、それが極樂行きの手形かなんぞに通用すると思つてゐるようですが、とんでもない間違ひです。こんなふうに考へてゐるから、戒名が悪いと浮ばれない、などと云われてあわてるのです。そうではないのです。戒名は死後の浮き沈みには何の關係もないのです。むしろ、生きてゐるうちにつけて貰つて、その戒名に適しく、信仰生活をつづけて行くことこそ大切なのです。ですから、淨土宗では「五重」を受けると、すべての人に戒名がつけられます。そして、つけて貰つた戒名にはづかしくないように、

念佛修行をこそはげむべきです。

戒名の本當の意味が分れば、戒名を變えることの、いかに無意味であるかがわかるわけです。そのせいかどうか知りませんが、日蓮正宗では、他の本尊は焼いてしまつても戒名を書いた位牌は、そのままにしておくようです。戒名に關する限り、靈友會や交成會よりは進歩したものといふべきであります。

四、佛壇と神棚

先日、或る會社の重役の方の家で起つた話をききました。その重役の奥さんが、人にすすめられて、日蓮正宗に入會しようとしたのです。旦那さんは相當の教育もあり、家庭内のことでもあるので、それで奥さんの心が満たされるのなと思つて、何もいわずに許るしていたそうです。ところが、さて、いよいよ入會して本部へ手続きを済ますと、早速、本部から人がやつて來て、まづ第一に、それまでお飾りしていた佛壇をあらためて、本尊様を取り除きました。また、茶の間に吊つてあつた神棚も、臺所にはつてあつた色々のお札も、全部はづしたり、はがしたりして燃してしまいました。そこまでは、前から話にきいていたので、奥さんも大驚きはしなかつたのです。ところが、本部から來た人は、家の中をぐるぐる眺めまわしていまし

たが、そのうち、その家の息子さん（多分中學に入つたばかりだつたとのことでした）の勉強机の上に飾つてあつた、一枚の寫眞を見ると、矢庭に、これも燃してしまつたのです。その寫眞は、息子さんがお父さんにねだつて、買つて貰つたカメラでとつたものです。鎌倉の八幡宮の鳥居を背景にして、友達と一緒に、ニコニコ笑つてとつたものでした。鳥居がいけなかつたのです。奥さんは、御主人の歸つた時に、この話をしたので。すると、それまでは奥さんの氣の済むことならと、許していた主人公も、顔色を變えて怒られたそうです。大人達の勝手な信仰から、折角樂しく撮つた子供の寫眞を焼くとは何事か。そんな、幼い心をもふみにちるような宗教へは、絶對に入ることとはならんと早速、奥さんを脱會させてしまつたのです。例によつて、そんなことをすると祟りがあるぞ、罰をうけるぞと、盛んにおどかされましたが、御主人の決心はいささかもゆるがずに、とうとう、頑張りとおしたとのことでした。

子供が喜んで飾つている寫眞まで焼く。こうなるともう理窟も、蜂のあたまでもありません。未開人は、人を呪つて殺ろそうと思うと相手をかたちどつた蠟人形を作つて、これを火にくべるといふことです。また、戀人に裏切られた若者は、相手の寫眞を、ビリビリ裂いて燃してしまいます。相手の體と寫眞とを、同じものと考えて、一方を破ぶ

れば、本物も傷つくとしても感ずるのでしようが、これは、未開野蠻な人間、失戀の悲しみに狂つた失意のすることです。それを、いやしくも、「學會」という名を公稱する人々が、やるのですからどうかしています。寫眞と本物とを混同して、鳥居の寫つた寫眞を焼いたのです。この流儀で行くと、その前でニコニコ笑つて立つてゐる、可愛い息子さんも、鳥居と同じく焼き捨てられたことにもなりません。とんでもないことです。

今流行している新興宗教には、こういった、理窟にならぬ理窟をふりまわすものが多いのです、そんなに、ほかのものが邪魔になるのだつたら、この廣い世間に生きて行くことは出来ません。人間は、その顔や姿の異なるように、考えもちがつています。信仰も色々です。それを何でもかんでも自分の方へ引き込もうとすることは、丁度、戦争中、軍部が國民全部に號令して、間違つた方向へ引づつて行つたのと同じことです。前號で申し上げたように、最近の新興宗教が、ファシズムの傾向に片寄つて來たのは、このせいなのです。

然し、信仰は、あくまでも自由であります。頭からおどかされて、心にもなく、先祖代々の佛壇をこわしたり、神棚を焼くことは、決して信仰の世界で行われるべきことではありません。それはもう、立派に、暴力を中心としたフ

アシズムの世界の出来ごとにはほかなりません。

人間は、誰でも、自分が正しいと思つてゐます。ことに信仰の場合には、自分の信ずる宗教を、一番ありがたいものと考えます。それだからこそ、信じられるのでもありません。けれども、間違わないで下さい。信ずるといつても、言われたことを、頭からうのみにして、ほかのことは考えずに、ただありがたい、もつたないでは、これは盲信であり、愚信であります。鰯の頭から後光がさしたと有難がる連中です。

ものごとを、本當に、良い悪い、正しい間違つてゐると判斷するには、ほかのものとくらべて見なければ分りません。砂糖の甘いのが分るには、鹽の味を知つて始めて分るのです。砂糖ばかりなめていたのでは、本當の甘い味は分りません。色々と味くらべをしてみる必要があるのです。題目も念佛も坐禪も、みんなよいことです。ただ、ほかのものをみんな駄目だとするとところに、他をかえりみないで、自分の我だけを張る、増上慢が出て來るのです。いたづらによその宗旨の本尊を焼いたり、神棚をこわしたりすることが、どんなに間違つてゐるかは、いうまでもないことです。

(大正大學教授)

(新年號は休みまして、二月號に因縁とたたきを書いてみることに致します)

後記

○十二月八日の成道會——釋尊のお悟りの日が来る度に、何とかならぬものかと思う。花祭より意義のあるこの記念日を、一般佛教界では行事を伴わない影のうすいものとなりつゝある。之には日本佛教が、一には、宗派として、二には、先祖崇拜の教として大衆化した點に起因すると思われる。花祭があれほどになつた事を思うと、努力と方便と協力があれば成道會の大衆への浸透も可能ではないか

○こんな事を痛感するのは、特に佛教立の諸學校に於てであろうと思う。私共の關係する幼稚園では、星の祭りと名づけて、十二月廿三日に行う儀式とお祝のおさらい會を頂點として、一連の保育プランを導入しております。楽しみと共にお祭が来るといふ気分が盛上るように試みて、三回目です。兒達は興味のないものは受けつけない點に、反つて、當事者の工夫があれこれと練磨されていきます。しかし、クリスマスが、ひいらぎとローソクでシンボライズされるのに、こちらはすべて造であり、孤軍奮斗であり、仲々効果はでて

こない。でも、三年目となれば、そろ／＼星の祭ですねーという父母の聲もするようになる。こういった事が、全國的にまとまつて考えられるように早くなりたいものだ。(眞野龍海)

○會員の皆様方の見えざる限りない愛情に支えられて今年最後の淨土をお手もとにお届けするよるこびを編集人一同深く味い、感謝申し上げます。

○明年度は特集號形式も予定して居り、差當り正月號は法然上人讀本、二月號は念佛讀本を予定して居ります。法然上人の御遠忌も近かくに迎えている私たちは、上人の道跡を慕いつゝ日夜精進を誓い合いたいもの、その意味でも、淨土正月號は期待していたゞけると存じます。

○明年も、ひたすら淨土の生長を念じて下さる、吉田絃二郎先生には變らず御執筆いたゞく予定、御愛讀下さい。(宮林)

○都會ではデパートのショールウィンドから年の瀬を感じ、急にあらたらしい師走の氣分に追いやられる。過ぎ去つた日を憾むのが凡人の常ではあるがいつそう強く感じさせられる。

○讀者と本誌の緊密な提携こそが

發展の鍵と信じておりますから惡いところはどしどしと指摘して下さい、出来る限り讀者の意志に添うように編輯し、だれが讀んでもこれは面白かつた、爲になつたと感じるように作り上げたいと考へております。

○「念佛の聲する所皆我が道跡」と晩年の不遇にも靜かに大往生を遂げた上人の姿を思念し、その末流に加はり得た事を感謝しながら本年最後のペンを置く。(水谷)

○物悲しく吹きそめる木枯を聞きながら、今年最後の後記を書く。ふり返つてみると、数えたてればいろ／＼拙かつた仕事が多かつた上に、種々事務の不手際なども加わり、今更こゝにこれ／＼であつたからなどと、言譯がましいことを書く勇氣も湧いてこない。たゞ本年経験した教訓を、大切に心に刻みつけ、来る年に期待を掛けるだけである。黙々と本誌に心をよせられ、御執筆下さつた諸先生、並びに讀者各位の温い御協力に深く感謝するのみです。本當に有難う御座いました。

○やがて津々浦々に鳴り渡る除夜の鐘を境として、新年がやつてきます。では、よき御越年を。

(梅津)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「淨土」 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十年十一月廿五日印刷
昭和三十年十二月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信常

發行人 佐藤 密雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京品川區上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

佛教曆に「浄土宗要綱」「浄土宗年中行事解説（お詣りの日）」「佛教聖訓集」を添加したもので、浄土宗の施本としては、これにこしたものではありません。

昭和三十一年 浄土宗三寶曆

寺院より檀信徒へ贈る年末年始の贈答品として最適！

○四六判、四十頁。定價一部四十圓、送料八圓。

浄土宗寺院に限り、一部 特價 十五圓。

賣切の場合が御座いますからお申込はお早目をお願いします

東京都港区芝公園十九號地ノ一番
浄土宗教化團中央本部
振替東京六一九三九番

特價奉仕

- 一、寺院用佛具類一式
- 一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのまつて、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松答・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

鎖ブランコ2人乗	¥ 13,000
鎖ブランコ3人乗	¥ 15,000
鎖ブランコ4人乗	¥ 22,000
鎖ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)
組立説明書送付